

# モニュメントとしての縄文貝塚

富岡直人

## — 論文要旨 —

考古学研究におけるモニュメントと記念物という用語を整理し、モニュメントと呼びうる遺跡について論考し広義のモニュメントと狭義のモニュメントを整理し、さらに狭義のモニュメントを第一、第二のモニュメントのモードに二分した。

日本全国に分布する縄文貝塚には、モニュメントとして意識的に造成されたと推定されるものが存在する。モニュメントと解釈しうる海外の遺跡との比較を通して縄文貝塚を総覧し、モニュメントとしての縄文貝塚造成の動機を考察し、再生を願うというやや曖昧な目的よりも自集団への働きかけの目的であったと結論した。

キーワード：貝塚，記念物，モニュメント，縄文モニュメント

## 1. 考古学におけるモニュメント

モニュメントMonumentsは、欧米考古学において広義と狭義の意味が存在する。広義では学術的意義のあるほぼ全ての遺跡を指す意味に用いる。狭義の意味では、特定の人や物事を伝える為に意図的に築造された遺跡を指す場合にも用いる。

日本においてもモニュメントの翻訳語である記念物は広義と狭義の両方の意味で用いられる。例えば、『文化財保護法』第2条第4項の定義<sup>(1)</sup>では、広義の記念物が定義され、生物にかかわる天然記念物を除き、記念物とされるものは不動産として土地に付属した構造を有し、「貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅」等のいわゆる「遺跡」がこれに対応するとされる。

日本における広義の記念物は、1919年制定施行の「史蹟名勝天然紀念物保存法」で、法制定の背景としたドイツでの文化記念物Kulturdenkmal<sup>(2)</sup>と自然記念物Naturdenkmal<sup>(3)</sup>の用語を背景に「史蹟」と「天然紀念物」の両者を「記念物」と総称した事に端を発している。ここで用いられる紀(記)念物は、学術的に意義があるものの総称であり、いわゆる広義のモニュメントに通じるものである。

ある時、国際電話で海外の研究者と日本の貝塚の議論になり、「縄文時代の貝塚はモニュメントといえるか?」という問いを受けた。彼の問いかけのモニュメントは、明らかに狭義のモニュメントであった。その時に私は少し間を置いてYesと返事を返した。本稿はその返事について説明を企てるものであり、狭義のモニュメントとしての貝塚が主題である。

狭義のモニュメントの築造には、主に2つのモード<sup>(4)</sup>が存在した事が考えられる。まず、第一に過去の人類がモニュメントを通じて自己や自集団の存在を他者へ誇示する等、何等かのアピールする意図を有していたモードが考えられる。この意図が働いた場合は、モニュメントは積極的に、かつ能動的に製作されたものといえる。本稿では、これを「第一のモニュメント」と呼ぶ。この動機には、林[2001]が指摘した社会的紐帯を高める役割<sup>(5)</sup>を担ったものと考えられる。

第二に、繰り返し同じ場を利用した結果、意図せずにモニュメントとなったモードもあったであろう。これは受動的に成立したモニュメントといえる。本稿ではこれを「第二のモニュメント」と呼ぶ。

本稿では、文化財保護法等の法令の用語である「記念物」との混乱を避ける為、狭義のモニュメントを指してモニュメントと呼ぶが、先行研究では記念物という用語を用いて同じ内容が論じられた例がある。狭義のモニュメントとしての縄文時代の記念物は、小杉[2001,

2013, 2014], 小林編著[2005], 熊谷[2005], 谷口[2017], 松木[2017]等によって論じられ、縄文人が意図的に築造した不動産<sup>(6)</sup>を指す用語としている。一方で、林謙作[2001]は、これらの論文で論じられている巨大な遺跡を「縄文巨大施設」と呼び、その社会性を検討した。林氏と筆者は、国際会議“Jomon to Star Carr”[平口他1996]に参加し、共にヨーロッパ中石器時代～新石器時代、縄文時代のモニュメントを含む議論にも加わった。林氏はモニュメントの用語にも熟知した上で、この論文ではモニュメントの用語の利用を避け、より機能的な印象を与える縄文巨大施設という用語を案出している。これは、モニュメントの有する社会的機能を強調する為と考えられ、第一の狭義のモニュメントを強く意識していたものと推定される。

本稿では、比較考古学的視点からあえてモニュメントという用語を用い、縄文人が自然景観を改変し構築した可視的遺構である貝塚について、狭義のモニュメントとみなし、そのうちの第一と第二のモニュメントを合わせて検討をする。さらに、縄文時代のモニュメントを総称して縄文モニュメントと呼称する。

## 2. モニュメントに相応しい貝塚とは

日本の場合、貝塚は全国で3,000程存在し、そのうちほとんどが縄文時代に属するとされる。文化財保護法に「貝塚」が遺跡の一例として掲げられる通り、日本では市民にも認知されたタイプの遺跡である。貝塚という用語は、貝層自体を指す場合と貝層が分布しない集落部分迄を合わせて指す場合がある。特に、第二次世界大戦後の混乱期には、貝層から肥料あるいは土壌改良剤を製作する為に大規模に破壊された例が全国で知られ、縄文時代より変形しながら伝わっている場合もある。本稿では、貝層を含む遺構群として貝塚の用語を用いる。

モニュメントと呼ぶに相応しい貝塚を現代人の立場から想像すると、土中に埋存し、存在が不明瞭であるというものではなく、貝殻が散布し塚状を呈するものといえるであろう。松木[2017: pp.99-145「先ケルト」から縄文へ]が、縄文記念物として掲げているのは、環状盛土と同じ様に中心部分が平坦で周囲に丘状の高まりのある貝層が分布する巨大貝塚である。

その貝層の丘の多くでは、放置すれば植物が貝層表面を覆い貝殻の散布がみられなくなる場合であっても、貝塚の野外展示で貝殻が散布する演出が意図的に行われている。さて、縄文時代にも貝層は露出していたのだろうか? 縄文人にとっても貝塚の表面に貝殻を露出させていた事は、貝塚の層中にみられる混土貝層や混貝土層、破損率の高い貝層の存在から推定がつく。貝層の堆積速度

が緩んだ時期があり、その上を歩いたり、その上で火を焚いたりした後、時には植物や土壌が貝層を覆う時期があったにせよ、再度貝層が堆積し、貝層が露出した事が繰り返したと考えられるわけである。貝層の上で火を焚いた痕跡や、破碎された貝殻が面として確認された例は、筆者が分析した中沢目貝塚（宮城県大崎市、縄文時代後・晩期）[富岡1995] や三引遺跡（石川県七尾市、縄文時代早・前期）[富岡他2004] 等で経験している。また、後述する様に、攪乱された貝層が元の地形を覆い、遺跡の形状を変化させている例は、複数の遺跡で知られている。例えば、阿武隈川下流域において地滑りによって変形・断裂した貝層の上でさらに生活の痕跡を残した土浮貝塚（宮城県角田市、縄文時代前期）の縄文人達は、大きな災害に遭って、貝塚が攪乱され断裂しても、すぐにはその集落を放棄しなかった事が残された遺物から推定されるのである[須藤他2008]。

この様に自然や人為によって攪乱された貝層であっても、その時期が縄文時代に遡るケースさえある。貝層の観察や記録には、帰属時期の慎重な検討が欠かせない事が指摘できる。

この様に繰り返し貝層が露出する貝塚を利用した縄文人は、その場に貝殻が散っている事を受け入れ生活していた事が推定され、あるいはその貝殻の散布が必要と考えていた可能性さえうかがわせるのである。

海外に目を転じると、モニュメントとしての存在を強く示す貝塚の例がある。アフリカ、セネガルのLe cimetière mixte de Fadiouthである。150m×200m程の丘の全域に貝塚が築かれ、その各所にイスラム教徒とキリスト教の墓が造成され、バオバブが植立していた(図1)。厚さこそ不明なもの墓域の全面に純貝層の分布がみられ、丘の全域に貝殻が散布する様相が見受けられた。この貝塚には、2008年に開催された国際研究集会“Shell Energy: Prehistoric Coastal Resource Strategy”のエクスカージョンで訪問した。この研究集会の成果は後にBailey et. al [2013] にまとめられている。サルームデルタ地帯に残るシヌ・サルーム貝塚群<sup>(7)</sup>での最古段階の貝塚は<sup>14</sup>C年代測定により4100年前に遡るという説明であった。Fadiouthの貝塚墓地についても先史時代に遡る可能性のある貝層の上に築かれたとの事で、墓地一帯が聖域であり、その清浄な貝殻で満たされた場所に埋葬地点が選ばれていたものであろうと、ホスト役のセネガルの研究者から説明を受けた。規模からみても、その説明は首肯し易いものであった。

それぞれの墓のマウンドや囲地は、可食タイプの貝類の清浄な貝殻で満たされていた。その場所に立ってあらためて考えた。この例と同じく、貝塚が明確にモニュメントであるとみなすのは、貝層自体が盛り上がり、地形を改変している場合で、往時には貝殻が散布していた事

が望ましいであろう。その様な希望を投影できる貝塚を我々はモニュメントとして考えたいのであろうと…。一方で、本当に食糧残滓を廃棄する為だけに残された貝層は、モニュメントを意識したのであろうか。この貝塚を形成した最初の貝殻群の一投は、この聖域ができる事を意識してなされたのだろうか。その答えは、否である様に思えてならない。この聖域がゆるぎないものとなったのは、貝殻が丘のほとんどを厚く覆い、墓墳を掘っても白い貝殻が出続ける様な状況が生まれてからではなかろうか。

日本も含め世界各地に残された貝塚には、最初より墓域として利用されていた場所に、貝殻を運び込んだケースもあったかもしれない。一方で、偶然の積み重ねで貝殻を運び込んだ場合もあったかもしれない。いずれの場合も、後の人々が聖域としての意味を付加し、さらに後の世の人々がその認識を継承し、現代に繋がる墓域が形成された様に考えられる。貝塚へ付加される意味は、継続されたとは限らず、世代の交代や新規入植者によって更新された可能性も考えるであろう。それは、ストーンヘンジが紀元前3100年以降、1000年近い期間、たびたび構造物が足されたり変更されたりした事と通底しているのであろう。

### 3. 縄文モニュメント

先述の通り縄文時代には、ストーンサークル（環状列石）、配石遺構、環状立石列、環状盛土、盛土遺構等、縄文モニュメントと呼ぶべき構造物がある。これらの大きさには各種あるので、凡そ最大長・最大径で50～100m程度の規模があるものを便宜的に大型縄文モニュメントと呼んで良いであろう。

東日本の縄文時代早期から、自然石を用いたモニュメントが出土する様になり、縄文時代中期後半～後期には石のみならず木も利用され広くみられるようになる。これらに含まれる遺構には比較的小型のものもあるが、大型



図1 Le cimetière mixte de Fadiouth (Senegal, 畑山智史撮影) 貝塚にキリスト教徒とイスラム教徒の墓が造られている

なものも多く含まれる。これらの多くはモニュメントの全体が円形・方形・コの字等の形を呈す場合が多い。また、墓坑をとまなう事も多い。さらに、これらの構造物は、一集落が形成したのではなく、多くの集落がその場所を共同して利用していた可能性も考えられている。

御所野遺跡（岩手県一戸町）では寒冷期が緩みつつあった縄文時代中期後半に造成された配石遺構が発掘されている〔高田他2015〕。その後、温暖化した縄文時代後期には大規模なストーンサークルや配石遺構が築造された。大湯環状列石（野中堂・万座、秋田県鹿角市）は、内外二重の輪を呈し、外側は最大径40mの円を描きながら、立石と組石で構成されている。これらの石の材質をみると7km程離れた地点から運ばれたものと推定されるが、それが正しいとすると5,500個以上もの石材が運ばれた事となる〔小林2005〕。

貝塚と配石を有する遺跡もある。石倉貝塚（北海道函館市、縄文時代後期）、崎山貝塚（岩手県宮古市、縄文時代前期～晩期、立石は中期中葉と推定）〔高橋他1995〕、門前貝塚（岩手県陸前高田市、縄文時代後期）が挙げられる。

崎山貝塚は立石もともない、温暖化の時期から寒冷になった時期にかけての縄文時代前期～中期長期間にわたって6～30m径の貝塚が5ヵ所に形成され、350m×200mの約7万m<sup>2</sup>もの広い集落範囲を有したと推定されている。

これらの多くは遺構の全体が円形や方形の環状やコの字状を呈し、墓坑をとまなう事が多い。また、周辺の遺構の分布を考慮し、この様な遺構群は、一集落が形成したのではなく、多くの集落がその場所を共同して利用していた可能性が考えられている。さらにこの様な大型構造物を有する遺跡は、巻貝形土製品や中空土偶の様な、精神生活を示す遺物を出土する事が指摘されている。

門前貝塚では弓矢状配石と列状配石と呼ばれる配石遺構が発掘されている〔佐藤他1992〕。この集石は、門前貝塚の貝層より西側の標高8m弱の低地域に残されていた。弓矢状配石の規模は4.9m×7.6mと比較的小さい平面形で「矢をつがえた弓」の様にみえる（図2）。発掘時に見学した筆者は、一瞥して漁撈にとまなう配石遺構の可能性も考えたが、標高が8m近く高い事、堆積層に水成堆積層が観察されなかった事から、少なくとも機能的に漁撈具と考える根拠が薄弱である事を理解し、調査者の所見に従う事とした経緯がある。なお、配石と同時期に発掘されたG13-4ピット出土3号人骨は子供の頭蓋骨で、左後方からの鈍器による打撃で損傷されている〔松村1992〕。報告者は人為的な損傷を検討しているが、巨大津波・地震等の不意の災害で生じた損傷の可能性も捨てられないと考えられる。その様な災害の跡地から、見つけ出した幼い骨格を丁寧に葬った遺構である可能性

も考えられる。

この配石は独立的に扱われ易いが、この配石以外にも列状配石や集石とも考えられる礫群が存在し、発掘区内で把握している範囲だけでも10m×30m程に分布がみられている。なお、隣接する土壙やピット群は寒冷な時期のやや緩みかけた中期末と考えられる一方、この配石・集石は後期初頭～前葉の温暖化が進んだ時期と推定されており、長い時間で貝塚の景観が形成された事が明らかである。まず、貝層が第二のモニュメントとして形成され、その後土壙・ピットが第一のモニュメントとして形成が始まり、さらに配石群も第一のモニュメントとして形成されたのであろう。これら第一と第二のモニュメントのモードが、門前貝塚の集落で交わっていた可能性さえ推定されるのである。

発掘区は緊急調査の為限定されていた事から図で理解いただける通り、現在把握できている配石・集石以外にも配石遺構が存在する可能性は高く、矢状配石も連続する可能性がある。報告者によると、周辺の地質は花崗岩のバイラン土が多い事から、これらの海蝕の痕跡を留める石材は3km程度以上離れた地域から運ばれ、配石以前に掘られた幅約60cm、深さ24cmの溝に埋め込まれ、意図的造形を計画的に配置したと考えられている。ただし、礫の由来は、巨大津波常襲地域である事から、津波石の様に運ばれて来た礫である可能性も残されている。弓矢状配石の矢状の先端の方向は西側の小友浦を指していたと推定される。その場合、門前貝塚の配石は、海や山を含む景観を意識したモニュメントであったと推定され、漁撈や海への祈りを意識したモニュメントの可能性もある。この遺跡の標高の低い地点は、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震で東にある大野湾側と西にある小友浦側の両方より巨大津波が押し寄せた地域でもある。この巨大津波では東の大野湾に近い地点にありながら、西の小友浦からの津波も大きかったという状況は、小友浦を指す様に造られた弓矢状配石が津波を意識したモニュメントであった可能性を補強するのかもしれない。

#### 4. 縄文貝塚の構造

貝塚の構造的特徴を示す指標には、広く平面形が用いられる。小型の貝塚は地点貝塚、点在貝塚、列点状貝塚と呼ばれるものがあり、土壙や住居址に短期間に小規模な貝塚が形成されたものである。これらの様な貝塚は、縄文時代早期には形成される様になっていた。

先述の環状盛土、盛土遺構の構造と類似性が指摘されるものが中央広場を有する環状・馬蹄形貝塚である。これらは、大型の貝塚に分類される。大型の貝塚の多くは地形を反映し弧状を呈す場合が多く、なかでも上部が平

坦で細長い舌状台地が広がる関東に環状・馬蹄形集落が多い事と通底している。このような平面形を有する貝塚は、縄文時代前期からみられるものである。ただし、このような貝塚が前期から始まったのか、それ以前に全く存在しなかったのかは、検討が必要である。縄文時代早期は寒冷な気候から温暖になる過程の時期で、貝塚を含め集落の全貌が明らかになった例は少ない。特に、縄文海進が最も進行した時期よりも古い段階の海浜部の貝塚は、沖積層下に埋もれている可能性がある。縄文時代早期に大型貝塚が全くなかったと断定するには、十分な根拠がない事に注意するべきであろう。

縄文時代前期貝塚以降の大型貝塚には、約500年以上の継続期間のなかで形成されたものがある。このような貝塚は、点在貝塚が連続的に形成され、弧状・環状を呈するようになった可能性と、当初より集落の環状構造があり、それを反映した可能性の2つが考えられる。

この節では、関東の貝塚を中心に貝塚構造について、研究史を踏まえ記述したい。貝塚の構造的差異については、機能的違いを想定する研究がある。この説では、ムラ貝塚を環状・馬蹄形貝塚に重ね、日常の生活にともなってきた貝塚と捉え、ハマ貝塚を日常生活にともなう遺物がみられない事から、浜辺での作業にともなってきた貝塚と想定している〔阿部1996〕。この説ではムラ貝塚は台地上の居住地の一角に形成され、比較的多様な貝殻と、土器石器等の道具類、哺乳類や魚類の動物遺存体がともなうとされる。また、ムラ貝塚には巨大な規模のものと、廃屋貝塚といわれる廃屋や溝、窪地などに形成された貝塚も存在する。廃屋貝塚がきっかけでの貝塚の形成は、第二のモニュメントとしての様相を具備しているとも考えられる。

大型のムラ貝塚とみなされるものは、関東地方では縄文時代中期・後期に多く、何枚もの純貝層が面的にも広く重なりあって形成されており、加曽利貝塚が典型的な例として挙げられる。一方で廃屋貝塚は、打越遺跡（埼玉県富士見市、打越貝塚 縄文時代早期）が例として挙げられる〔阿部1996〕。

大型のムラ貝塚の例を続けて挙げたい。加曽利貝塚（千葉県千葉市、縄文時代中期～後期）は、寒冷期から温暖期にかけて残された貝塚で、2つの環状貝塚が接続した様な形態を示し、貝層の主体はイボキサゴとハマグリで、脊椎動物も豊富に出土している。貝塚の総面積は約5万5000m<sup>2</sup>に及び、堅穴住居は貝層分布域外を含め110棟以上が出土し、典型的な大型のムラ貝塚の様相を示している。貝塚の成因については干貝加工場とする説と、日常生活の所産とする説がある〔村田2013〕。

西ヶ原貝塚（東京都北区、縄文時代中期～晩期初頭）は寒冷期・温暖期・寒冷期にかけて長い期間利用され続けた貝塚である。規模も大きく、径180m程の範囲に3

つの貝層が展開した馬蹄形貝塚と推定され、ハマグリ、ヤマトシジミを主とする貝層の面積は約4万m<sup>2</sup>と推定され、住居址や墓域も出土し、大型のムラ貝塚であったと推定される〔西澤2012〕。

曾谷貝塚（千葉県市川市、縄文時代中期末～後期）はハマグリを主とする貝層で、幅50～100m、長さ300mを超す巨大な弧状の貝層と3つの貝層があり、貝層のみでも面積で約8万m<sup>2</sup>に及ぶとされ、国史跡範囲は421万m<sup>2</sup>にまで及ぶ。住居址、墓域、貯蔵穴も発掘されており、大型のムラ貝塚の様相がみられる。

姥山貝塚（千葉県市川市、縄文時代中期～後期）は、ハマグリを主体とする貝層で、幅50m×長さ150mの2群の貝層から構成される馬蹄形貝塚で、脊椎動物門も豊富に出土している。

堀之内貝塚（千葉県市川市、縄文時代後期～晩期）は7つ程の貝層群から構成され、ハマグリ、オキシジミ、イボキサゴを主とする貝層は150m×300m程の範囲に環状に並び、総面積は約3万m<sup>2</sup>に及ぶとされる。住居址や墓域もあり、今までに縄文人骨は12個体以上が発掘されている。

荒海貝塚（千葉県成田市、縄文時代後～晩期）は、塩水棲のハマグリとサルボウガイ、汽水棲のヤマトシジミが主となる大小4つの貝層が160m×100mの範囲に展開し、墓域も出土している。

東海地方にも大型のムラ貝塚が複数分布する。50～70m×40m程の3つの貝層が一部間隔を空けて径120m程の範囲に環状に並んでいたと推定される保美貝塚（愛知県田原市、縄文時代晩期前葉～中葉）では、多量の塩水性貝殻と脊椎動物遺存体が検出され、焼人骨や盤上集骨墓を含むヒトの墓域やイヌの墓域も形成されていた〔増山他2017〕。

伊川津貝塚（愛知県田原市、縄文時代晩期）は、約180m×60mの広がり分布し、貝類とともに多量の脊椎動物も出土した。ヒトの墓域が発掘され、180体を超す個体が出土し、大型のムラ貝塚の様相を示している〔伊川津遺跡発掘調査団編1988〕。

ハマ貝塚は浜辺や水域に近い低地部に形成され、層厚の割には住居址や道具類が出土しないとされている。ハマ貝塚の例は、袋低地遺跡（東京都北区、縄文時代中期）〔東京都埋蔵文化財センター編2001〕、中里貝塚（東京都北区、縄文時代中期）〔阿部編2014、中島他2018〕、伊皿子貝塚（東京都港区、縄文時代後期）〔伊皿子貝塚遺跡調査会編1981〕、宝導寺台貝塚（千葉県千葉市、縄文時代前期）、神門遺跡（千葉県千葉市、縄文時代早～前期）、実信貝塚（千葉県市原市）が例として挙げられる。

ハマ貝塚の例として挙げられた中里貝塚（東京都北区、縄文中期～後期）は、500m×100mという広範囲に



図2 門前貝塚 (岩手県陸前高田市) 配石遺構・土壌・ピット分布図 [佐藤他1992改変]

分布しており、さらに大型のマガキと大型のハマグリを主体とする貝層の厚さは最大4.5mにも及ぶ。さらにその面積は約5～10万m<sup>2</sup>と推定されている。

これらの、貝層の形成は、貝類の食用としての消費活動との関連があると考えられている。つまり、生きていた貝類を採集し、それらを食べたり加工したりした後、得られた貝殻を廃棄する事で貝塚が形成されたと考えているわけである。このような行為が、集落規模と比較すると大規模で、自家消費以上に貝類を採捕している状況を想定し、干貝を作り内陸の集団と交易をしていたとする説もあり〔後藤1973〕、ムラ貝塚・ハマ貝塚の双方について可能性が考えられている。

一方、斜面貝塚と称される分類もある。これは、地形の斜面に連続的に貝殻が積み上げられ形成されたものを呼ぶ用語で、環状貝塚や地点貝塚にも同様の構造がみられる事もあり、例えば、先述の加曾利貝塚にも斜面形成の貝層が存在する。

貝殻成長線分析がなされた関東地方貝塚出土ハマグリと東北地方出土アサリの採集季節性を図3と図4に掲げる。里浜貝塚西畑地点、曾谷貝塚A（縄文時代中期末～後期前葉）、中里貝塚等の大型貝塚では、大潮が大きい春前半と日中に潮が引き易い春が夏に偏って貝類の採集が集中的に実施され、上高津貝塚では秋前半にもわずかなピークがあると把握された。一方、曾谷貝塚B（縄文時代後期）、木戸作貝塚（縄文時代後期、千葉県千葉市）、上高津A貝塚（茨城県土浦市）は春でのピークが弱く周年での採集が把握されている〔小池1979・1983、中島他2018、富岡2010〕。このうち木戸作貝塚については分析者の小池は、限定的な区からのサンプルであった事が原因の可能性があると指摘しており、検討が必要である。

定住性が高かった貝塚集落であると考えられる里浜貝塚西畑地点は夏前半に集中を持ちながら、ほぼ周年にわたる貝採集も認められ、アサリの限定時季集中・周年採集の様相を呈している。

これらの現象は、一般的に大型貝塚が貝類採集に有利な季節を中心に偏って作業を行っていたものの、周年での採集も実施するケースが多かった事を示すとともに、大規模な貝塚の多くは集中して採捕された貝類資源の一時的集積や分配にかかわっていたであろう事を示し、さらに複数集落がこの貝採集にかかわった可能性さえ想起させる。

なお、貝塚は食料残渣の廃棄場と考えられるが、野放図に食料残渣を捨てていたら、腐肉食性動物が繁殖し、貝塚集落に生活する人々の生活を脅かしかねないであろう。現代の衛生観念からは乖離していただろうが、食糧残渣廃棄後に土壌をかぶせたり、焼土や灰をかけたりする等、彼らなりの経験則として何等かの工夫があったと考えらるべきであろう。

住居址は、円形の中央寄り部分や貝塚内、あるいは貝塚外に形成される例がある。一方で、このような馬蹄形や環状の貝塚は、縄文人が意図したものではない、とする説を唱える研究者もいる〔後藤1989：p.113〕。たとえそうだとすると、その構成を縄文人は許容した事に違はなく、意図の程度をどの様に測るかが問題となろう。

また、約2万m<sup>2</sup>の広がりを持つ環状構造を採りながら、中心には配石と墓壙やピット群、周囲に盛土と破碎された貝層の分布が確認された石倉貝塚（北海道函館市、縄文時代後期）も特筆される構造といえる〔田原他1999〕。従来看過されて来た事であるが、分厚い攪乱貝層が主に上層にみられるケースは全国の巨大貝塚で知られており、石倉貝塚の例を参考にすれば、それらは貝層堆積後のある時期に意図的に残された可能性を検討するべきであろう。攪乱層を検討するのは、考古学者にとって苦痛かもしれないが、遺跡形成過程を考察する上では重要なポイントである。

## 5. 東北地方中部の大型貝塚

東北地方中部の三陸海岸、仙台湾沿岸は、日本で有数の貝塚集中域である。そのなかにはムラ貝塚の様相を呈し複数棟の堅穴住居をとまなう大きな集落に付属する貝塚もあれば、ハマ貝塚的に作業場に付随した貝塚のみがみられる場合がある。一方で、貝層が極めて貧弱な集落もある。この地域の貝塚を構成する貝殻は、海水域の貝塚では、ハマグリ、アサリ、カキ類、ハイガイ、アカガイ、アワビ類などであった。淡水域の貝塚では、ドブガイ、イシガイ、オオタニシなどであった。いずれの貝塚出土貝類も、繁殖力が高い為採集場に耐え、周辺の環境から多量に採集する事が可能な貝類が割合として多かった事が指摘される。

本地域における貝塚の巨大化は、縄文時代前期から中期以降が顕著である。本地域の大型貝塚には、仙台湾では里浜貝塚（宮城県東松島市）、三陸海岸では蛸ノ浦貝塚（岩手県大船渡市）が挙げられる。

里浜貝塚は縄文時代前期から晩期中葉までに8地点の貝塚の集まりで構成され、遺跡は合計すると約16万m<sup>2</sup>の広がりを持つ〔東北歴史資料館編1986、1987〕。この貝塚群を一望するのは、現在であっても地上面では難しく、それぞれの貝塚が面する入江から眺めた場合に、1つの貝塚とその背景に隣接地点が望まれる程度である。これらの眺望と構造については次節に詳述する。

リアス式海岸が連なる三陸沿岸において、環状構成を採らなかった貝塚の割合は仙台湾沿岸の貝塚と比較しても多いが、その背景は、これらが残された地形によると考えられる。頂部が平坦で比較的大きな面積を有する丘陵に築かれた蛸ノ浦貝塚は、約2mに及ぶ貝層が残され

た温暖期より寒冷期にあたる縄文時代前期～中期の貝塚で、丘陵に200m×200m、約5万m<sup>2</sup>の規模で一部が切れるものの環状を呈している [大船渡市立博物館1987]。貝層にはマガキやアサリが多く含まれ、純貝層も形成されていた。また、マダイやマグロ属をはじめ、多数の魚類が含まれる魚骨層もみられ、また釣針等の漁具類も出土した。

存続期間が長い貝塚としては、宮野貝塚（岩手県大船渡市、縄文時代前～晩期）や中沢浜貝塚（岩手県陸前高田市、縄文時代前期～晩期）が挙げられる。

宮野貝塚は標高約20mの上面が緩やかな斜面を持つ地上の約4万m<sup>2</sup>の範囲に遺物が散布し、A地点（20m×20m、縄文時代後・晩期）、B地点（10m×20m縄文時代中～晩期）、C地点（7m×15m、縄文時代中～晩期）、D地点（15m×10m、縄文時代中～晩期）、E地点（15m×15m、縄文時代中期～晩期）、F地点（40m×35m、縄文時代中期）、G地点（15m×15m、縄文時代前期）の貝層が環状に点在している。遺構では、竪穴住居や配石遺構も出土している [岩手県教育委員会事務局文化課1998：p.50]。

中沢浜貝塚は多くの縄文人骨や埋甕や豊富な骨角貝製品を出土した事で研究史上有名な貝塚で、丘陵上の約2万m<sup>2</sup>の範囲にA地点（20m×20m、縄文時代前期・晩期）B地点（10m×10m、縄文時代前期・晩期）、C地点（10m×10m、縄文時代前期～後期）に貝層の分布が知られている [岩手県教育委員会事務局文化課1998：p.60]。標高が5～30mと幅広い点も三陸沿岸の貝塚の特徴を具備している。

三陸海岸では比較的緩やかな丘陵に占地した大洞貝塚（岩手県大船渡市、縄文時代中・後・晩期）は、寒冷期・温暖期・寒冷期の縄文時代中期・後期・晩期にかけて営まれた集落で、約4万m<sup>2</sup>の遺跡範囲にA、A'、B、C、D地点の貝層を有している。標高が約15～25mに遺物が散布している点は、他の急峻な地形に占地した貝塚とは趣が異なっている。また、D地点では配石遺構が出土している。

貝層の形成という面ではそれほど大規模ではないが、先述の様に特徴的な配石をともなう構造を有する門前貝塚（岩手県陸前高田市、縄文時代中期～後期）も比較の為に挙げておく。門前貝塚は、寒冷期より温暖期になった時期にあたる中期～後期の貝塚で、丘陵から低地域にかけての標高20～5mながら当時の海浜や向かいの旧広田島（広田半島）から視認し易い110m×200mの範囲に6ヵ所の貝層が環状に展開し、その外側に配石や土壇・ピットが展開し、遺跡の推定面積は約1.1万m<sup>2</sup>の規模で、比較的コンパクトである [岩手県教育委員会事務局文化課1998：p.51]。

同じく縄文時代前期～中期にかけて形成された大型貝

塚には大陽台貝塚（岩手県陸前高田市広田町）が挙げられる。大陽台貝塚は、標高が約20～50mの斜面、緩斜面に残された遺跡で、発掘が広範に及んでいない事から状況は不明な点が多いものの、貝層より下側の斜面に遺物が散布する事からこの範囲に存在する可能性も考えられる。遺物の散布は200m×150mの範囲に約3万m<sup>2</sup>の広がり有り、貝層は遺跡内でも比較的標高が高い約50mのA、B、Cの地点に存在し、大まかには弧状を呈する。特にA地点の層厚は1.5mに達する [岩手県教育委員会事務局文化課1998：p.57]。また、標高20mで大陽台貝塚に接する様に分布する大陽貝塚と一連の貝塚である可能性も高く、その場合はより広い範囲に集落が想定される可能性がある。貝層と遺物散布に標高差が大きい大陽台貝塚は環状貝塚等とは異なった築造原理を持ちながら、貝層をアピールしたであろう部分では共通性が認められるのである。

縄文時代前期以降のこの地域では、釣針、銛、ヤスといった骨角製漁具の発達も顕著であるが、大陽台貝塚ではその様な漁具の出土は少なかったとされる。その一方で、大陽台貝塚では大きな魚体を誇るマグロ属やマダイの遺存体が多く含まれた事が特筆されている [及川他1979]。

三陸沿岸～仙台湾沿岸の貝塚では、魚骨層がみられる場合が多くあり、大型貝塚の形成は、単に貝採集にのみ依拠していたのではなく、より多くの集約的労働が必要となる大型魚類の漁撈活動と強く結びつき、それらの生業の複合の上にあった事をうかがわせる。

## 6. 貝塚内外からの視線

貝塚は純貝層のみならず、土壌がわずかに含まれる混土貝層、より多めに含まれる混貝土層がある。また、土層、焼土層、砂層、灰層が含まれている場合もある。その為、貝塚の貝殻の散乱は、縄文時代には露出していた場合と、土に埋められてみえにくかった場合と、灰や砂が供給されていた場合等が考えられる。

ここでは、先述の宮城県東松島市里浜貝塚のうち、寒冷期にあたる縄文時代晩期中葉の斜面貝塚である西畑地点の例で考えてみよう。海から丸木舟で西畑の入江へ到着した縄文人は、砂浜に接岸する。そこは西畑北地点と呼ばれる遺跡で、マガキを処理し、製塩を行った作業場が点在している。この部分は、ハマ貝塚である。その作業場所にはマガキが集積され点在貝塚を形成していた。

目線を上に上げ谷合の方向をみると、標高5m程の斜面地に40m×20mの範囲で最大厚2.5mの貝層を有する西畑地点の貝層がみえ、そこにはアサリやハマグリが運ばれ、処理され、廃棄されていた。この貝層からは脊椎動物の遺存体も多数検出されており、まさにムラ貝塚の様

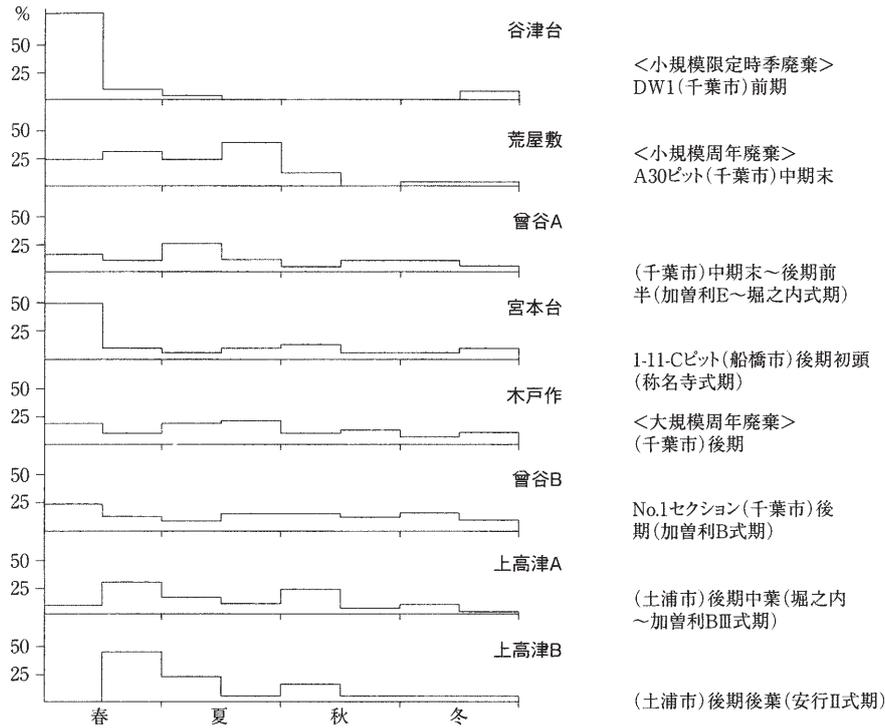


図3 縄文時代関東地方のハマグリ採集季節性 (小池1983: p.227一部加筆)

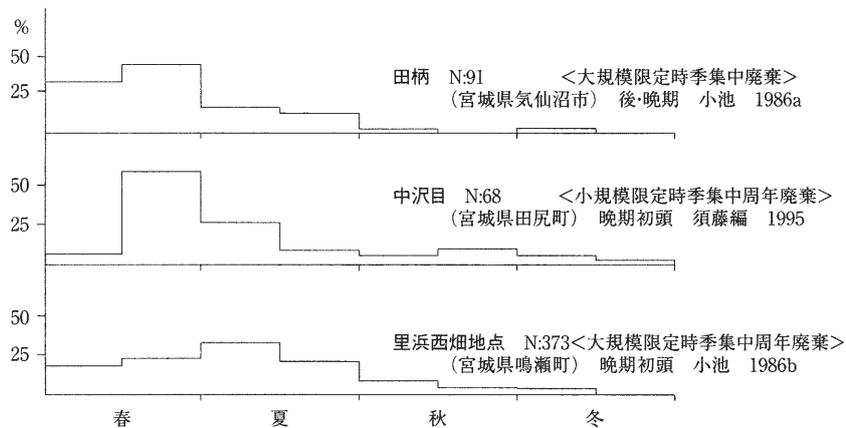


図4 縄文時代東北地方仙台湾周辺地域のアサリ採集季節性

相がみて取れるのである。つまり、里浜貝塚の西畑・西畑北地点の場合貝類は隣接するハマ貝塚とムラ貝塚で選択的に廃棄され、同時期に形成された2つの貝塚の組成・構造の違いを生み出したのであった。

また、遺跡周辺の丘からの視点を考えよう。これらの貝塚は海からみえるだけでなく、背後の里地区の丘と台囲の丘からもよく見渡せた位置にあるのである。この西畑地区の貝層は縄文時代後期後葉には形成が始まり、最終的には縄文時代晩期後葉まで使われた事が、包含される土器等の遺物から明らかである。

西畑地区の貝塚の北東に形成された同時期の貝塚で、

10m程の間隔をおいて背後の斜面に里地区貝塚(寺下地区)がある。こちらは標高10m程度の丘陵に150m×50mの範囲に最大厚6m程の貝層を有している。また、台囲の丘の南斜面に形成された風越地区貝塚が同じ時期に形成されていた。

この様に里浜貝塚は複数の時期の貝塚がそれぞれの入江に面する様に集まって形成されている。中心部の丘陵頂部の調査は進んでおらず、居住域や広場の存在は不明であるが、部分的な発掘で墓域が各所に分布しているのは確かである。

## 7. 西日本の大型貝塚

西日本にも大型貝塚の分布はみられる。粟津貝塚とも呼ばれる粟津湖底遺跡（滋賀県、縄文時代早期～中期）で南北約950m、東西約460mの広い範囲に3ヵ所の貝層の分布が確認されている。粟津貝塚の場合は、河川の岸辺に残されたセタシジミ等の淡水棲貝類を主とする貝層と人骨を含む脊椎動物遺存体が検出され、植物層も残されていた〔瀨口2016〕。脊椎動物遺存体や人骨も含まれるがムラ貝塚やハマ貝塚という様相以外に、自然の営為で形成された堆積層も想定される事から、自然堆積層も含んだハマ貝塚と称すべき様相と考えられる。低湿地の貝塚には、この様な事例が複数存在する事が考えられる。

瀬戸内海沿岸での貝塚の大型化は彦崎貝塚等で示される様に、前期からが確実な例であるが、本来は早期には既にかかなり大きな貝塚が存在した可能性は排除できない。今まで発見されている貝塚の多くは瀬戸内海の島嶼部にあり、それも浸食崖で見つかった場合がほとんどで、貝層の広がり全般がつかめたケースは少ない。

黄島貝塚（岡山県瀬戸内市、縄文時代早期）の場合は25m×10m程の範囲に貝層の分布が確認されているが、遺物の分布はそれよりも広く、早期の地層が浸食されると推定される海蝕崖の下からも遺物が採集される事から、本来の遺跡の規模はより大きかったものと考えられる。

犬島貝塚（岡山県岡山市、地竹ノ子島貝塚 縄文時代早期）は、遠部慎らによる2008年以來実施されたトレンチ調査で30m×20m程の範囲に貝層が広がっている事が把握された〔遠部他2009〕。その調査をきっかけに上部に前方後円墳が築造されていた事、貝層の範囲はその前方後円墳のプランに重なっており、前方後円墳の築盛によって浸食が避けられていた事が判明した。この2つの貝塚で特徴的であるのは貝類のみが多く出土し、魚類や鳥類、哺乳類の遺存体がほとんど見つからない点である。技術水準を考慮するならば、この現象は漁撈を行わなかった為というよりは、この場に脊椎動物の遺存体を廃棄あるいは埋納する事に規制があった為であろう。崖下からはヒトの扁平脛骨が採集されたが風化が激しく、<sup>14</sup>C年代測定で結果が得られなかった。墓域があった可能性は残される。独特のハマ貝塚と呼んで良いであろう。

彦崎貝塚（縄文時代前期・後期・晩期）は、一部を造成によって失っているが、南北約100m、東西約80mの弧状をなす範囲に遺物と貝層の散布がみられ、その範囲のなかには居住域、墓域、低湿地性の植物遺存体の分布もみられる〔田嶋編2006〕。この貝塚からは、脊椎動物

の遺存体も豊富に出土している。以上より、大型のムラ貝塚の様相を示す遺跡と考えられる。

津雲貝塚（岡山県笠岡市、縄文時代後期～晩期）は、宅地造成や溜池の築造で地形の改変が激しいが、幅170m、奥行85mの範囲に遺物の散布がみられ、直径約50m程度の範囲で貝層が分布していたと推定されている〔笠岡市教育委員会編2015〕。多数の人骨が発見された事で有名な貝塚であるが、一方で今までの調査で、脊椎動物遺存体を含む貝層と埋葬人骨は発掘されているものの、住居域が判明していない点が特徴的で、墓域と貝層が主な構成要素と推定されている。また、脊椎動物の出土も豊富である。動物遺存体の豊富さと規模の大きさから、ムラ貝塚のなかでのハカ（墓）貝塚とも呼びたくなる程、墓域が中心的存在である事をうかがわせる特異な貝塚である。

萩ノ岡貝塚（愛媛県今治市、縄文時代前期・後期・晩期）は、ボーリング調査より径50～70mの範囲で丘陵尾根の北麓側と南麓側に径20m程度の貝層がある事が把握され、西日本で少ない環状構造を有する可能性が指摘されている。貝類とともに脊椎動物遺存体が豊富に出土する事が特徴的で、発掘が進んでいない為、評価する事はやや困難であるが、ムラ貝塚である可能性が高いといえよう。

九州にも大型貝塚がみられる。東名遺跡（佐賀県佐賀市、縄文時代早期）は、南北約460m、東西約200mの範囲に、6つの貝塚が分布し、貝層の面積は約1,700m<sup>2</sup>と推定され、大型貝塚の様相を呈している〔佐賀市教育委員会編2015〕。上層からは巨大なスミノエガキがまとまって出土し、下位からは貝類を含め豊富な動物遺存体が出土している。このうち食用となったものか不明な巨大なスミノエガキが上層に集中して出土する点は、貝塚集落の終焉での特異的な何等かの活動を示したものかもしれない。

御領貝塚（熊本県熊本市、縄文時代後期）は、5万m<sup>2</sup>に及ぶ範囲に、ほぼ環状を呈していたと推定される。この御領貝塚は西日本における最大規模のもので、南側の貝層は発掘報告があり、現在も残されているが、北側の貝層が失われ、貝塚全体での平面形が不明となっている。

このような様相の違いは、自然環境の違いとともに、縄文人の社会性に依拠すると考えられる。つまり、東西日本で貝塚に付与する象徴性が異なったものであったといえるであろう。そして、この象徴性の違いは、社会的な違いも一面である事は間違いないが、その根底には生物相や気候の違い等、資源量を左右する環境が影響していた可能性が高い。その意味で、南北に長い縄文文化の分布内容を、等質であるという先入観で理解しようとする事は難しく、我々は差異に目配りし、異質な集団が分立

していた縄文社会像を冷静に見つめる必要がある。

## 8. おわりに

本稿で論じた通り、大型貝塚、ストーンサークル、円形巨木列、環状土籬等の多くの縄文モニュメントは環状に近い形状を呈するが、多くの場合これらは巨大な土木造形が残せる地形が選ばれた上に意図的に縄文人が環状のプランを選択したものと推定される。地形によるモニュメント造成の制限が低い土地は、日本の様な山林の多い国土の場合、台地や丘陵上では潤沢に存在するわけではない。もしも低平な沖積平野でモニュメントを造成しても、それは洪水や高波、津波等の災害で破壊されて、稀にしか後世に伝わらなかったであろう。見晴らしが良く、周辺の広い範囲から臨む事が可能な貴重な台地や丘陵上にテリトリーの占地をした事こそが、先ずはモニュメントが形成される契機となった事は疑いない。

縄文モニュメントの構築には、石・木材・土といった身の回りの自然の素材と縄文人が廃棄物として得た貝殻や魚骨、鳥骨、哺乳類骨等の動物遺存体、さらに土器等の道具の破片が用いられた。一方で、海外の考古遺跡で見られる様に、この構造を作る目的でレンガや切石を製作する様な事はなかった。これらのモニュメントの造成において、地形との組み合わせが十分に意識されていた結果なのである。

縄文モニュメント構築は、比較的単純ではあるが、集約的あるいは長期間の作業の累積によって形成されたものである。住居址を環状に配置する事は縄文時代早期には既に開始され、その後縄文時代前期には環状貝塚が造られるようになった。長期間に形成されるなかで環状貝塚・馬蹄形貝塚は幾つかの複数のパターンがみられるが、貝殻を集積する事や、中央を掘窪めたり、内部や周辺に住居を構築したり、広場や盛土を形成するなど、複数の技術、多くの人員の協力が欠かせない状況が推定される。さらにこの様な構造を有する構築物を作っても、これが直接的に食料生産に関係するとは考えにくい。つまり貝塚を含め、縄文時代のモニュメントは、食糧獲得活動とも関連しあう社会集団の紐帯を強めるプロセスで構築が進められたと考えるべきであろう。

なお、ストーンサークルであっても、複数人が協力しなければ移動できない大型の巨石から一人で運びうる礫が含まれており、それぞれに縄文モニュメントの一部を構成している。礫は、後述する貝塚での貝殻と同じく、力仕事に難しい子供や老人でも容易に運べるものである。縄文モニュメントを理解するには、この様な大規模な労働と、小規模な労働の組み合わせを評価する事も必要である。

貝塚は、縄文時代前期から環状を呈する様な平面プラ

ンを持つ貝層が作られる様になった。全ての大型貝塚で貝殻成長線分析が実施されているわけではないが、関東や東北地方中部で発掘された大型貝塚では、貝殻が多い層は比較的短い堆積期間で形成されケースが多かったと推定された事、さらに二次的に死殻が集められたのではなく、ある時期に集約的に採集された貝殻が多量に集積されたものと推定されている。それらは、自家消費もあろうが、干貝等への加工に回される事もあったであろう。食用とした後、多くの場合は当初は第二のモニュメントとして、後に第一のモニュメントとして巨大な土木造形となったのであろう。

ただし、これら第一のモニュメントと第二のモニュメントの存在はモードであり、後者の場合であっても築造されたモニュメントの構造が大きくなるに従って、第二のモニュメントが第一のモニュメントに近づいて行った場合もあったに違いない。つまり、第一と第二のモニュメントのモードの境界は曖昧で、交わりあうものであったといえよう。

多くの場合、考古学的モニュメントは第一のモニュメントであろうが、一方で貝塚の形成の当初は廃棄行為の累積であろうと類推され、平面プランが歪んでいたり、環状構成が採られていなかったりする場合には、第二のモニュメントに相応しいと考えがちである。

一方で、貝層の累積が地形的な高まりとして丘状を呈する場合は、最終的には第一のモニュメントとしての条件を具備していたと考えがちである。ただし、これらの確証は、単に遺構の平面や断面の形では得られない。本稿でもたびたび触れた通り、貝殻成長線による堆積速度の検討や貝層の形成季節の検討が欠かせないものであると指摘しておきたい。

また、大きさ・規模も重要な点と考えられる。一般的にモニュメントと呼ばれている遺跡は、人間的な可視的不動産がモニュメントとして把握される。本来、その大きさは千差万別でありうるが、経験則として人間の体格を数倍～数百倍も上回った場合に、我々はモニュメントと認知し易い。つまり、モニュメントが見いだされるか否かは、その大きさにも依存しており、意図的に造られた第一のモニュメントであっても規模が小さすぎて認知できないケースも考えられる。モニュメントを規模で定義すると、質的な議論を妨げかねない事が指摘できる。

さらに、時代・時期・地域によるモニュメントとしての機能の違いも指摘できる。時期的には中期～後期に狭義の第一のモニュメント的貝塚の形成が増加するが、そのなかでも、門前貝塚の様に具体的に津波を想起させる様な矢状配石と墓域が組みあう事は、後世の自集団とのエピソードの共有が意図された構造が指摘され、特有な存在と指摘できよう。

多くの貝塚が再生を祈る場として機能した事は、壊れ

た器物の包含や埋葬された縄文人やイヌ、イノシシの遺存体より多くの先人が論じてきたが、この場合仏教でみられる様な輪廻転生観は縄文時代には未発達で、自集団間の紐帯に基づく行動規範による動機が強かったのではないかと考えたい。

貝採集の入会地である干潟等の沿岸域に接するハマ貝塚やムラ貝塚であった場合には、その貝殻の累積は一集団による専有を拒絶し、地域集団が共同して利用すべき地点の証しとして、縄文人の目に映るものであったものと考えたい。これらを具体的に検証するには、貝殻成長線分析等自然科学的分析による客観的データによる検討が欠かせない事をあらためて指摘しておきたい。

さらに彼らが協働して貝層を形成する事は、消極的に行われた活動の結果ではなく、強い意志と慣習のなかで積極的に選ばれたものであり、その場が埋葬地になる場合は、入会地に訪れる集団の記憶に働きかける意図を有していたのではないかと考えたい。

## 謝辞

1986年に筆者に最初に貝塚がモニュメントとしての側面を持つ事を詳細に論じてくれたのは、仙台でお会いした林謙作先生であった。その後、須藤隆先生には東北地方の数多くの貝塚と一緒に回る機会を頂き、周辺の地形を含めて巨視的に貝塚をみる事をご教示頂いた。約20年前の事になってしまったが、Richard MacNeish先生やGeoff Bailey先生には、縄文文化や日本の貝塚について議論をさせて頂き、その経験が本稿の執筆の起点となった。松井章先生には、禅問答の様な貝塚論をぶつけられ、目から鱗を何度も落として頂いた気がするが、言い返せなかった所見を本稿にも織り込ませて頂いた。佐々木務氏、熊谷賢氏、金野良一さん、故佐藤正彦さんには、三陸沿岸の貝塚についてご教示や資料を頂いた。宮本一夫先生、山本悦世氏、山田康弘氏にも、数多くの貝塚に関するご教示を頂いた。畑山智史君にはアフリカセネガルの貝塚について、メモの記録と写真を提供頂いた。その他多くの方々にお世話頂き、本稿を擱筆する事ができた。記して感謝を示したい。

## 註

- (1) 貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁りよう、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で我が国にとって学術上価値の高いもの（以下「記念物」という）。
- (2) 19世紀にヨーロッパでモニュメントの研究が進展し、その影響を受けた郷土保全Heimatschutzの運動でKulturdenkmalの

概念の浸透がみられ、これが日本にも受け入れられたものとみられる。田中 [1982] は、「史蹟名勝天然記念物保存法」の基本構想に関わった黒板がBrown [1905] “The Care of Ancient Monuments”を「下敷きにし、それを換骨奪胎した」と評している。なお、Brown [1905 : p.18] は、ドイツ語の文化記念物Kulturdenkmalのdenken（考える）という言葉が含まれる点に注目し、「モニュメントは我々に過去を振り返らせる様に引き止め、失われた過去や失われたものを、思い起こさせる大事なもの」と定義しており、これが黒板にも受け入れられたものと推定される。また、そのなかには、自然的な景観も含まれる事が読み取れる。

- (3) 三好 [1914] は、自然記念物は広い意味では史蹟、名勝も含む事を紹介しつつ、コンヴェルツ氏の解釈に従い、「人為の変化を蒙らないもの」でなければならない、としている。
- (4) 本稿で用いたモードmodeという用語は、最頻的な様式のまともりは把握できるものの、類似する様式との差異がやや曖昧で、緩やかな様式のまともりを示す集合を指す概念として用いた。
- (5) 林は、縄文巨大施設の社会的紐帯を高める役割について次の様に記述している。「共同でつくりあげた（縄文巨大）施設で儀式やマツリを行い、それに参加する。この様な過程を通して、互いの結びつきを確かめあうのではないだろうか。巨大施設は、それらを建設し、利用される住民の精神的な結びつきをあらためて確認し、日常生活のなかで必要となる共同作業の基礎を固める役割をしていたのである [林2001 : p.107]」。ただし、（ ）内は富岡の補足。
- (6) 小杉 [2019 : p.62] は、「記念物とは、現在の人たちへ、また未来の人たちへ、ある一定のメッセージを送るべくして作られるもの」と、縄文人が意図的に記念物を残したとする考えを記している。
- (7) シヌ・サルーム (Sine-Saloum) 貝塚群の様子は、この研究会に我々を誘って下さった松井先生が解説をしている [松井2009]。

## 引用文献

- 阿部芳郎 1996 「水産資源の活用形態」『季刊考古学』55 : 口絵白黒6-7
- 阿部芳郎編 2014 『ハマ貝塚と縄文社会 : 国史跡中里貝塚の実像を探る 先史文化研究の新視点 : 明治大学日本先史文化研究所 : 4』 [雄山閣]
- 伊川津遺跡発掘調査団編 1988 『伊川津遺跡 渥美町埋蔵文化財調査報告書4』 [渥美町教育委員会]
- 伊皿子貝塚遺跡調査会編 1981 『伊皿子貝塚遺跡』 [日本電信電話公社港区伊皿子貝塚遺跡調査会]
- 岩手県教育委員会事務局文化課 1998 『岩手の貝塚 - 岩手県内重要遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ - 岩手県文化財調査報告第102集』 [岩手県教育委員会]
- 愛媛大学法文学部考古学研究室編 1996 『萩ノ岡貝塚』 [上浦町教育委員会]
- 及川 洵・遠藤輝夫・遠藤勝博・金子浩昌・牛沢百合子 1979

- 『大陽台貝塚発掘調査概報』[陸前高田市教育委員会]  
 大内千年 2004「環状貝塚に関する一視点 - 流山市三輪野山貝塚の事例から -」『時空を超えた対話 - 三田の考古学 -』[慶応義塾大学文学部民俗学考古学研究室]: pp.91-96  
 大船渡市立博物館 1987『蛸の浦貝塚 大船渡市立博物館調査報告』[大船渡市]  
 遠部 慎・犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム 2009『犬島貝塚: 瀬戸内海最古の貝塚を求めて』[六一書房]  
 笠岡市教育委員会編 2015『国史跡 津雲貝塚』[笠岡市教育委員会]  
 熊谷常正 2005「岩手県の縄文記念物」『縄文ランドスケープ』(アム・プロモーション): pp.76-91  
 小池裕子 1979「関東地方の貝塚遺跡における貝類採取の季節性と貝層の堆積速度」『第四紀研究』17-4: pp.267-278  
 小池裕子 1983「貝類分析」『縄文文化の研究2 生業』[雄山閣]: pp.221-237  
 小池裕子 1986a「宮城県田柄貝塚CL-40区出土のアサリ・ハマダリの貝殻成長線解析について」『田柄貝塚Ⅲ 骨角牙貝製品・自然遺物編』[宮城県教育委員会]: pp.533-539  
 小池裕子 1986b「アサリの成長線分析 貝殻成長線分析にもとづくアサリの採取季節の推定について」『里浜貝塚V 東北歴史資料館資料集15』: pp.48-53  
 小杉 康 2001「巨大記念物の謎を探る」『新・北海道の古代- 旧石器・縄文文化』[北海道新聞社]: pp.182-201  
 小杉 康 2013「大規模記念物と北海道縄文後期の地域社会について(予察)」『北海道考古学』49: pp.35-49  
 小杉 康 2014「文化制度としての縄文モニュメント」『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料集 貝塚研究の新視点・墓とモニュメント』[日本考古学協会]: pp.805-818  
 小杉 康 2019「世界遺産としての縄文文化」『環状列石ってなんだ 御所野遺跡と北海道・北東北の縄文遺跡』: pp.50-88  
 小林達雄 2005「縄文ランドスケープ」『縄文ランドスケープ』[Um Promotion]: pp.9-20  
 後藤和民 1973「12-1 加曾貝塚」『日本考古学年報』24(1971年版)[日本考古学協会]: pp.38-39  
 後藤和民 1974「東京湾東岸の貝塚群とその保存」『考古学研究』21-2: pp.50-59  
 後藤和民 1978「貝塚町貝塚群」『京葉の貝塚 - 市川・松戸・千葉の主な貝塚』日本考古学協会: pp.11-12  
 佐賀市教育委員会編 2015『東名遺跡群 東名遺跡群総括報告書』[佐賀市教育委員会]  
 後藤和民 1989「馬蹄形貝塚と縄文社会」『考古学ゼミナール 縄文人と貝塚』[六興出版]: pp.87-128  
 佐藤正彦・佐々木陸夫 1992『門前貝塚 - 県道広田半島線の改修に伴う緊急発掘 - 陸前高田市文化財調査報告書第16集』[岩手県大船渡土木事務所・陸前高田市教育委員会]  
 須藤 隆・富岡直人・早瀬亮介・杉山陽亮・齋藤慶吏・小野章太郎・高橋 哲・吉川純子・齋藤彰裕 2008『角田市文化財調査報告書33: 阿武隈川下流域における縄文貝塚の研究土浮貝塚』[角田市教育委員会]  
 瀬口真司 2016『琵琶湖に眠る縄文文化 粟津湖底遺跡』[新泉社]  
 高田和徳・岡村道雄・辻誠一郎・山本総光・西本豊弘他 2015『御所野遺跡V 一戸町文化財調査報告書70』[一戸町教育委員会]  
 高橋憲太郎・三浦千秋 1995『崎山貝塚 宮古市埋蔵文化財調査報告書44』[宮古市教育委員会]  
 田嶋正憲編 2006『彦崎貝塚範囲確認調査報告書』[岡山市教育委員会]  
 田中琢 1982「遺跡遺物に関する保護原則の確立過程」『考古学論考』[小林行雄博士古稀記念論文刊行会]: pp.765-783  
 谷口康浩 2017『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』[同成社]  
 田原良信・中村公宣・佐藤智雄・野辺地初雄・神林哲夫 1999『函館市石倉貝塚』[函館市教育委員会]  
 東京都埋蔵文化財センター編 2001『袋低地遺跡 東京都埋蔵文化財調査報告第93集』[東京都埋蔵文化財センター]  
 東北歴史資料館編 1986, 1987『里浜貝塚V・VI - 宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究V・VI 東北歴史資料館資料集15, 19』[東北歴史資料館]  
 富岡直人 1995「VI章6 動物遺存体」『縄文時代晩期貝塚の研究 中沢貝塚II』(東北大学文学部考古学研究会): pp.163-212  
 富岡直人 2010「貝類」『人と動物の関わり合い 食料資源と生業圏 縄文時代の考古学4』[同成社]: pp.77-90  
 富岡直人・上岡真帆・谷村 彩 2004「三引遺跡出土斧足網の貝殻成長線分析」『田鶴浜町三引遺跡(下層編) 一般国道470号線改良工事及び主要地方道田鶴浜線建設工事に係わる埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』: pp.424-441  
 中島広頭・中野守久・牛山英昭・安武由利子 2018『史跡 中里貝塚総括報告書』[東京都北区教育委員会]  
 西澤 明 2012「縄文ムラと貝塚: 北区西ヶ原貝塚の事例から」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』26[東京都埋蔵文化財センター]: pp.237-242  
 林 謙作 2001「縄文巨大施設の意味」『縄文社会の考古学』[同成社]: pp.98-107  
 平口哲夫・富岡直人 1996「展望 国際会議“縄文文化からスター・カーへ”に参加して」『考古学研究』42-4(168): pp.19-24  
 堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26[史館同人]: pp.1-19  
 増山禎之・清水俊輝・山本かな子・茂原信生・山田康弘他 2017『保美貝塚 田原市埋蔵文化財調査報告書11』[田原市教育委員会]  
 松井 章 2009「日本の遺跡・世界の遺跡 西アフリカ セネガル シヌ・サルーム(Sine-Saloum) 貝塚群」『考古学研究』56(3): pp.132-134  
 松木武彦 2017『縄文とケルト辺境の比較考古学』[ちくま書店]  
 松村博文 1992「門前貝塚出土人骨1990年度資料 岩手県門前貝塚出土縄文人骨について」『門前貝塚 - 県道広田半島線の改修に伴う緊急発掘 - 陸前高田市文化財調査報告書第16集』

- [岩手県大船渡土木事務所・陸前高田市教育委員会]: pp.224-250
- 三好 学 1914 「欧米各国に於ける天然記念物保存事業視察談」『史蹟名勝天然記念物』1-1: pp.3-4
- 村田六郎太 2013 『加曾利貝塚 日本の遺跡46』[同成社]
- Bailey, G. N., Hardy, K., Camara, A. 2013 "Shell Energy: Mollusc Shells As Coastal Resources" [Oxbow Books]
- Brown, G. B. 1905 "The Care of Ancient Monuments" [Cambridge University Press]
- Thomas, C., Tilley, J. 1993 'The Axe and the Torso: Symbolic Structures in the Neolithic of Brittany' in "Interpretative Archaeology": pp.225-272. (Oxford: Berg)
- Pollard, J. 2000 'Ancestral Places in the Mesolithic Landscape' in "Archaeological Review from Cambridge" 17: pp.123-138